



が数人いたようです。(数年前の同様事象を思い出しました)

他には、そういった事情を知らない他職場の人が数人、ホームでその日最終乗務の人の最後の電車到着を待っていました。無事到着後、労いの言葉と共に当該車掌に近づき、花束や記念品を贈ろうとしたり、写真を撮ろうとしたり・・・そういった私たちにとって当たり前の光景が全て見張り要員によって阻まれたということです。「そういうことは改札を出てからにして下さい」・・・と。

一番問題なのはこの部分！

この時、当該車掌は、すごく嫌な思いをしたのではないかと思います。人によっては一生の思い出となるはずなのに・・・

ここまで頑なに禁止するのであれば、前もって社員かどうかを確認して、事情を説明すれば良かったのではないのでしょうか。最低限、退職者本人の前でそういうゴタゴタは避けるべきだったと思います。一生に一度のその瞬間を、本人も迎える人たちも気持ち良く過ごせる対応が何故出来なかったのか、非常に残念に思います。

上からの一方的なお仕着せではなく、是非職場ごとの事情も考慮しながら、社員の様々な声を集め、より良い方向に向かえることを臨みます。

最終乗務の出迎えについて



最後の電車は一生の思い出のはず

退職者、及び転勤者の最終乗務のホームでの出迎え等は、現在支社内では「出迎えは5名以内」等を細かく決められ、指導されています。ホームは利用者優先の場所であり、この指導の元となった事象を考えれば、致

し方ないかもしれません。

現在は、現場ごとの対応となっているようですが、ホームでの出迎えを完全に禁止している職場での先日の出来事が耳に入ってきました。

勿論、当該職場の社員はいませんが、それを見張る？管理者

うたてつノススメ⑭

泣き虫列車 (石川さゆり) 1974年6月

あの人が摘んできた撫子を胸に抱き
さよならと言ったら泣けちゃった
動き始めた汽車の窓から
ポーポポポ、ああポポポ、ぼろぼろ
投げたハンカチは届かない

海沿いのあの町に 置いてきた初恋は
つぼみのまんまで終わったの
呼んでいるよな 白いかもめも
ポーポポポ、ああポポポ、ぼろぼろ
いつか消えちゃった あかね雲

幸せになるんだと手を振ったあの人の
麦わら帽子が また浮かぶ
泣いているよな汽笛鳴らして
ポーポポポ、ああポポポ、ぼろぼろ
汽車はあの人を 遠くする

曲名も可愛らしくてイネ！！

今や演歌の大御所の一人となっているが、こんなに可愛らしい少女演歌の時代もあったんだなあとつくづく・・・。1973年3月デビューで、5枚目のシングル。

これを歌った時はまだ高校生だが、歌唱は既に完成されていて改めてすごい人だと思った。少なくとも同年代の〇〇トリオとかは、足元にも及ばないレベルである。

作詞は冬野卓という人。汽車に乗ってこの街を出て行くのは「私」見送るのは「あの人」という設定。汽車の「ポポポ」という擬音や涙を表現する「ぼろぼろ」が、はかない少女の恋心の歌によく合っている。汽車の窓から投げたハンカチも、前もって手渡し出来れば良かったのに、そんな勇氣さえためられたいじらしさも伝わる。

汽車に乗って遠く離れていくのは「私」なのに汽車が「あの人」を遠ざけるという表現に、どうにもならないやるせなさが入められている。他にも言葉のひとつひとつに情景を思い浮かべることが出来、演歌部門？の鉄道ソングでは断トツだと思う。この歌手の鉄道ソングは他に、大ヒットの「津軽海峡冬景色(’77)」「哀愁本線(’79)」などがある。しみるなあ。